

知財ドラマ
「それパク」
特別コラム

初めての「それパク」 法廷ロケ

会員 西野 卓嗣

ロケバス

それは、朝7時の新宿郵便局前集合から始まりました。

最終話（第10話）の法廷ロケに出発です。八王子のある大学の模擬法廷を使わせてもらうとのことでした。

撮影現場には、先月号に書いた生田スタジオ以外には行くことはなかったのですが、この法廷ロケには監修者として来てほしい、と依頼されたのです。

私は神戸在住ですから当然前泊です。新宿の東京都庁にほど近いホテルを予約して（したつもり）、前日の夕方、新神戸から品川、浜松町を乗り継いで都庁前へ。そこで降りて、大きな立体交差の道を進みました。ナビだと立体交差があまり鮮明に表示されないのが、ちょっと苦労しましたがなんとか目的のホテルのロビーに着きました。

ロビーは欧米系と思われる外国人でごった返していました。あの新型コロナ禍が全く嘘のよう。ただ、コロナ禍の前のようなアジア人の姿は、ほとんど見ません。まだ中国からの団体観光は規制されていたからでしょう。私の住んでいる神戸の街でも同じことが言えました。

私がロビーのカウンターの前の自動チェックイン機でチェックインを試してみたのですが、うまくヒットしません。それを見ていた、外国人と思われるフロントクラークが流ちょうな日本語で「オコマリデスカ」と。そこで、うまくチェックインできない、と訴えると、彼はその機械の前でいろんな操作をしてくれたのですが、やはりヒットしません。それを見かねた日本人女性の、彼の指導員みたいな人が出てきて、カウンター内の機器を操作しながら再度私の情報を聞き出したのですが、やはりだめでした。

よおく思い出してみたら、私がWebでそのホテルを予約したつもりだったのができていなかったようでした。私はいつものWebでホテルを検索し予約したつもりだったのです。一瞬血の気が引きました。ロビーはお客さんでごった返していたので、予約なしでまだ部屋があるのだろうか。もしホテル難民にでもなってしまうたら…、明朝早いのに…と頭の中は不安で渦巻きましたが、それもその女性クラークのお陰で解決し、無事泊まることができてホッとしました。

次の問題は「新宿の郵便局」です。ネットで調べたら新宿駅の近くに郵便局が10件ほどあるではないですか、そこでプロデューサーに電話をして、翌朝やっとの思いでマイクロバスの出発地にたどり着けました。

1時間ほど走ってその大学に着いたのですが、まだ開門前ということで、我々が乗ったマイクロバスは近くのコンビニの駐車場で30分ほど待機。なかなか厳しいなあと思いました。

模擬法廷

新しくてなかなか立派な模擬法廷でした。私は企業に在籍していた40年ほど前から大阪地裁、東京地裁、横浜地裁そして東京高裁（そのころはまだ知財高裁はありませんでした）と、たまにはありましたがいろいろな法廷を見てきたつもりでした。しかしこんなに新しくて立派な法廷は初めて。

現在も私は大阪地裁で侵害訴訟の原告代理人をしています。口頭弁論も弁論準備手続きもオンラインなので、このままテレビドラマに持ってはこれません。裁判シーンには映らないからです（今風にいうとバエない）。

その模擬法廷は、壁に暗褐色のオーク材と思われる落ち着いた色調の板材が張り巡らされた格調高いものでした。魂の告白をするにふさわしい場所です。

日テレにも模擬法廷スタジオがあるらしいのですが、なんだかあんまり立派なものではないので、この大学の模

擬法廷を借りたとのことでした。

ロースクールを持っているいくつかの大学には模擬法廷がありますが、平日に撮影させてもらえるのは、この大学しかなかったようでした。

法廷の横の部屋には、日テレが持ち込んだ見慣れない機器がいろいろと並べてあり、全体として大掛かりな感じがしました。

そして、その部屋の、法廷に一番近い一角にモニターが2台横に並べておいてあり、その前に監督とストップウォッチを握りしめた女性が座っておりました。私はその二人の間からモニターを見る位置に座ります。

その部屋には、音声だとか映像を確認する人だとか他に6~7人。

一方、法廷内では例によって数十人のスタッフが忙しそうに働いていました。

なお、裁判所の外観は東京中目黒に最近できたビジネスコート撮影させてもらったようです。なので、このテレビを見た何人から、あの法廷はビジネスコートの中なのですか、と聞かれました。

これと同じような質問が、月夜野ドリンクの外観と室内の事務所についても尋ねられました。私は明確に否定しておきました。事務所は生田スタジオ内のセットですよ、と。

聞いた人はちょっとがっかりしたようでしたので、私は曖昧な返事をしておけばよかったかな、と少し反省しています。



真剣にモニターを見つめる筆者

法廷内の構成

法廷には、裁判官に向かって左側に原告代理人席があり、その席に座るエキストラの弁護士の左に、ハッピーマイルの知的財産部長で弁理士の田所ジョセフ（田辺誠一さん）が座ります。

また、裁判官に向かって右側の、原告代理人席と相対する位置に被告代理人席があり、月夜野ドリンクの顧問弁護士と、その右に月夜野ドリンクの知的財産部課長で弁理士の北脇雅美（重岡大毅さん）が座ります。

そして、一段高い裁判官席の中央には裁判長が座り、その裁判長をはさんで、右陪席（裁判官に向かって左側）と左陪席（右陪席と反対側）にそれぞれエキストラが座ります。また裁判官席の手前の一段下がったところに書記官と速記官のエキストラが座ります。

日テレのスタッフには右陪席と左陪席の違いが分からないようなので、右陪席がベテラン裁判官で左陪席は言ってみれば若手だ、と教えたら、ちゃんと右陪席には年配の人が、また左陪席には比較的若い女性のエキストラが座っていました。

そして傍聴席の被告席に近い所には、月夜野ドリンクの知的財産部員の藤崎亜季（芳根京子さん）と、その横に

同知的財産部長の熊井崇（野間口徹さん）が裁判長の方を向いて座り、その横に又坂特許事務所長の所長で弁理士の又坂市代（ともさかりえさん）がすわりました。傍聴人として他に数人のエキストラが座ります。

また傍聴席の原告に近い所にハッピースマイルの知的財産部員の堀口健（橋本淳さん）が座っています。

なお、証人としてハッピースマイルの開発部員の篠山瑞生（秋元真夏さん）が立つことになっています。通常の裁判所なら法廷の横に証人控室があるのですが、ここの模擬法廷にはそれがないので、彼女は証人席に立った状態から撮影が開始されることになりました。

撮影シーン

まず裁判官が法廷に入ってくるころから撮影するのですが、監督からそのシーンについて、「起立、礼、着席」は誰が言うのか、と聞かれました。

そこで、私は、先ず裁判長が奥のドアから手前に出てきて自席の前に立ち、次いで右陪席、左陪席の順に入ってきてそれぞれ自席の前に立つのです、と説明しました。そして裁判長が法廷に入ってきたら原告、被告および傍聴人等が全員起立し、裁判長が礼をしたらそれに倣って全員が礼をする。また、裁判長が着席すると同時に全員着席するので、いちいち「起立、礼、着席」は言わないと説明しました。

しかし結局はこのシーンはテレビには流れませんでした。時間の関係でしょうか。

何度かリハーサルをし、そのリハーサルの際には監督はその現場で、身振り手振りで俳優さんたちに指示を与えていました。そして、本番では隅に置かれていた2台のカメラとマイクそして多くのライトなどが撮影場所に引き出され、別室のモニターの前に陣取っている監督の号令の下で撮影の開始です。

いよいよ原告と被告の甲論乙駁が始まります。

先ず、原告代理人も被告代理人も裁判長の方を向いてしゃべること、まあ時折相手側を見るのはいいでしょう、と指示したら、最初原告代理人が椅子に座ったまましゃべり出したので、しゃべるときは必ず立ってください、と注意をしたことも。

また被告代理人（北脇じゃない弁護士の方）がなんだかちょっとニヤつきながら裁判官に向かってしゃべっているようなので、一緒にモニターを見ていた監督に、ニヤけるようにと監督から指示したのですか、と聞いたら、いやそんなことはない、と。そこで、裁判所で代理人がしゃべるときはもっとまじめ感がないと不謹慎な気がします、と私が言いました。すると監督はすぐ彼のところにとんでいって何か指示をしていました。戻ってきた監督は、あんな顔なんだそうですよ、と笑ってしまいました。しかし、その後その俳優さんは真面目な顔でしゃべってくれました。これについては後日プロデューサーも気になった、と言っていました。

また、ハッピースマイルの開発部員の篠山瑞生の証人尋問のシーンで、北脇の質問に対して原告代理人の田所が、裁判長の許可なしに「失礼じゃないですか…。」と突然しゃべり出すシーンがあるのです。本来誰でも発言をする前には裁判長の許可があるのですが、つい激昂してしまい、あのような発言になってしまいました。しかし彼はそのあとすぐに裁判長に「すみません」と謝ります。このシーンはよりドラマらしくするためです。この時、実際の訴訟事件で相手があまり嘘ばかりいうので、私がつい「嘘ばかり言いなさんな！」と叫んでしまったことを思い出していました。

なお、ここで印象的だったのは、被告代理人役の重岡大毅さんが、慣れないはずの単語がいっぱい含まれるセリフを、いともさりりとかつ現実味を帯びた形でしゃべっていることでした。さすが俳優さん！

一方、原告代理人役の田辺誠一さんは、リハーサルの時はセリフが結構つかえていたので大丈夫かな、とちょっと心配したのですが、カメラが回りだすとピシッとセリフが言えるのです。ここでも喝采！

法廷のシーンでは特許事務所長役のともさかりえさんは傍聴席にいたのであまりしゃべるシーンはないのですが、他のシーンを含め彼女も弁理士役としてのセリフをすらすらしゃべっていたので、俳優は皆、聞いたことないセリフでもちゃんと言えるんだ、と感心しました。

また、月夜野ドリンクの知的財産部長役の野間口徹さんは撮影現場に到着するやいなや、多くのスタッフに気軽に声をかけていて、彼の人格がにじみ出ており、私は野間口さんのファンになりました。

あと、裁判長も俳優さんだったのですが、というよりは俳優さんだからでしょうか、「遠山の金さん」ばりにセリフにとっても抑揚をつけるのです。普通、裁判官は抑揚など付けず淡々としゃべるものですから、これも指摘させてもらいました。そしたら彼は休憩の合間に私のところに来て、裁判官の立ち居振る舞いなどを聞いてくれました。彼も勉強家です。

重岡さんも私のところにときどき来ては、どっちを見てしゃべるべきか、普通は裁判長を見てしゃべるとしても証人尋問の時はどうか、などいろいろ聞いてくれました。彼の丁寧な人柄を感じた一瞬でもありました。

ところで、ロケの場合、特に今回はカメラが2台だけでした。生田スタジオならカメラが6台あるので、一つの演技を多方面から同時に撮影できるのですが、2台だと同じ演技を何回も角度を変えて撮る必要があるのです。例えば、原告代理人がしゃべっている様子を互いに異なる角度から2台のカメラで撮影するのですが、彼がしゃべっている間に、被告代理人はどんな顔、どんな態度をとっているか、また傍聴人はどうなのかについては同時に撮影できません。そこで、原告代理人は同じ演技を何度も何度も繰り返し、その間それを聞いている被告代理人や傍聴人そして裁判官などを夫々撮影していくわけです。同様に被告代理人も何度も何度も同じ演技を繰り返し、その間それを聞いている原告代理人や傍聴人の姿を撮影するのです。ですから時間がかかるはずですが、多分5分54秒程度の映像だと思うのですが結局撮影に1日を要してしまいました。しかし、後日テレビで見て、このシーンは過不足なく、とても印象的かつ効果的に映っていたと思いました。

この日、最後にハッピースマイルの開発部員の篠山瑞生（秋元真夏さん）の証人尋問と彼女の手先のシーンを撮り終えて終了となりました。午後4時でした。

スタッフの人達

前にも書きましたが、ロケにもスタッフは数十人同行していて、監督以外にも監督の指示を俳優や現場に伝える数人の助監督がいて、カメラやライトそれに衣装、小道具、ヘアメイクさらには音声など、あとは私にはわからない仕事を忙そうにしている人たち。

そのなかでちょっと印象的だったのですが、我々と同じ別室にいて大きなヘッドホンを着けていた音声さんが、撮影の最中に突然「誰かしゃべり声が入っているぞ」とマイクを通してこわい声を出したのです。

私はびっくりしたのですが、そしたら離れた撮影現場から「すみませーん」という声が返ってきて、その後また撮影が続行です。その音声さんから、裁判官や訴訟代理人の机に載せられているマイクは何か、拡声するためのものか、録音するためのものかと聞かれましたが、私は明確にはわからなかったので、拡声でしょうと答えておきました。

また、俳優さんが着ている服装や付けている装飾品は、衣装さんたちが用意しているもので、同じ法廷で撮影していても、シーンが変わるたびにその服装や装飾品を変えるのです。そのとき、ある衣装さんから、原告代理人の洋服はちょっと派手気味なのですが、弁理士さんはあれでも不自然じゃないのですかと、もっと派手な服装の私に問われました。私は若干戸惑いながら問題ないですよ、と答えておきました。

と、ここまで書いたところで、最終話（第10話）が放映されました。そこで第7話～第10話についてすこし触れてみます。

【第7話】

今宮食品から、その会社が所有している特許権を月夜野ドリンクに2000万円で買い取れという警告状が来ます。これに対して、月夜野ドリンクはいろいろと特許公報を調査した結果、今宮食品の青汁には、青山製薬堂の特許発明が実施されていることをつかみます。そこで月夜野ドリンクはこの今宮食品に対し、青山製薬堂の亡くなった元社長の発明による死蔵特許化した特許権を買い取って対抗しようとするのです。

ここで、亜季が今宮食品に、青山製薬堂から譲渡された特許権の特許証を示そうとするシーンがあるのですが、さすがに特許証だけを見せても譲渡されたとはいえないので、特許権の譲渡契約書をチラッと見せるのです。ホン

トは登録原簿のコピーを見せればいいのですが、北脇等が青山製菓堂を訪れて数日後に今宮食品と会うという設定になっていたのに、致し方なく譲渡契約書を作ってもらい、それを特許証と共に見せることにしてもらいました。

この青山製菓堂の特許は13年前に取得されたもので、元社長の奥さんが未だ権利維持をしていたということになっています。

この点、知財のことに詳しくない人には、何の問題もないと映るでしょう。しかし、企業人ならすぐ気が付くと思いますが、未亡人が実施もされない特許の高額な維持年金を払い続けるのは、はなはだ疑問です。通常の企業なら自社実施も他社にライセンスもしない特許権について、どんどん高額になっていく維持年金を支払うことはよほどの理由がない限りしません。その辺りを私としては少し問題提起したのですが、ドラマではサラっとながされてしまいました。

なお、私は死蔵特許ではなく、「休眠特許」を推奨したのですが、原作重視の観点からかこうなりました。

【第8話】

パテントトロールが出てきます。私個人の話ですが、以前電機会社に勤務していた時代に米国のパテントトロールから次から次へと脅され、多額の実施料を支払わされたことを思い出しました。

ここで「009特許」というのが出てきます。正式には特許F168009号なのですが、このFはドラマなので架空のものにするために付けられたものです。ただ、プロデューサーに、これでは長たらしいのでドラマの中で短縮形にするにはどうすればいいか、と聞かれました。発明の名称をつけて〇〇〇特許でもいいのですが、その昔、私の所属していた企業が米国の企業から警告を受けた際に、特許番号の下三桁でその特許を特定したことを思い出して、このドラマでも使ってもらいました。

また、中野誠司（板尾創路さん）という研究者が太陽新社に特許権を奪い取られるというシーンもありました。私は特許を受ける権利だけ太陽新社にだまし取られればいいのではないかと言ったのですが、ドラマ制作者からは発明者の名前も別人に変えたいと言われ苦勞しました。出願人名義変更届だけではなく、発明者の名前を変えるための手続補正書や宣誓書なども作らねばならないので面倒です。

更なる難題は、パテントトロールの芹沢和馬（鶴見辰吾さん）の名前を特許庁に提出する書類に記載させたい、というのです。芹沢と中野の関係が客観的に示される公的な書面が必要だと。そこでいろいろと考えたのですが、弁理士でもない芹沢を代理人にしたあげ、これらの書類を作成することにしました。どうせ嘘を書くのだったら代理人なしで発明者本人だけにすればいいのですが、ここは苦し紛れでした。本当はここで又坂弁理士に、芹沢に対して「弁理士法違反のおそれも…」と叫ばせたかったのですが、その部分は割愛されました。

【第9話】

著作権関連の事件が登場し、若干もめるような内容だったのですが、結局著作者のハナモ（山崎静代さん）が契約書をきちんと読めていなかったことで解決にしました。

ここで一番重大な出来事は、ハッピースマイルから特許権侵害の警告が来たことです。ストーリーの全体的な時間軸から、この出願が特許になるまでに3か月しかなかったのです。このことに気づかれた視聴者の方はほとんどおられないと思いますが、この「3か月」を不思議に思われた方は結構いらっしゃるのではないかと思います。私としては早期審査を使っても最低6か月はかかるのでその点を主張したのですが、制作者からはそれを何とかしてほしいと頼まれました。そこで、ハッピースマイルは大会社なので外国出願もしていることを前提として、スーパー早期審査を実施したことにして辻褄を合わせました。

この被警告事件で、月夜野ドリンクの増田社長が北脇に「…どうにかできひんのか!? なんとかしてくれ! なあなあ おい!!」と言って迫るシーンが出てきます。私が企業にいる時代に全く同じことを言われたことが何度かあります。ただし、私のいた会社の社長はもうちょっと上品で言い方はマイルドでしたが。

なお、このセリフは、完成した台本にはなかったのですが、撮影直前に入れられたようです。しかしこのセリフはこの場面を引き締めるのにとっても良い効果が出ていると感心しました。

ここでの一番のポイントは、北脇の判断で、ノウハウを企業秘密として秘匿し、出願しないことでした。私としてはここで、最終話のことも考慮して、先使用権を取得するための準備をするシーンを入れてほしかったのです。しかしその要件などが若干面倒で一般の視聴者にはわかってもらいにくい、ということで採用されません。結果として北脇が相当苦悩することになってしまったのです。まあ、北脇の、今までの自信に満ちた姿勢とは違った苦悩する姿を撮りたかったのかもしれませんが。

もし先使用権の準備がきちんとしてきていたなら、北脇は「…だから僕はその点も準備していたんだよ」とまた自信ありげに話すことになるでしょう。だから、このようにしたのかなとも思います。

先使用権の話は、後になって亜季がボードを使って説明するシーンが出てきますが、これはこんなこともあります、という話だけで具体的な対応策にはなっていません。

また、営業部員の松尾の「ほ、ほら、みんな、心配ないって。あの北脇さんだよ！いつものように、バシッと解決策を用意してくれるって…」という発言もあります。このセリフも私が企業にいる時代によく言われました。従ってこの言葉も私にはよく刺さります。

更にクロスライセンスや国会図書館での調査、「マルアール」いうセリフ等についても私が提案しました。

ただ少し気になったのは、亜季が「北脇さんが可哀そう・・・」と涙ぐむシーン。しかしホントは、他人ごとではなく、北脇個人よりも亜季が所属する月夜野ドリンク自体を助けられない、ということの方がいかに大変なことか、を表現してもらいたかったのですが。

即ち、北脇の判断ミスで月夜野ドリンクが危機に陥ることが問題だったはずですが、ドラマとしては「北脇が可哀そう」にすり替わってしまったのです。その方がドラマチックだったからでしょうね。

【最終話】

この話の最初の方で、月夜野ドリンクの総務部員の五木の恋人で、ハッピースマイルの開発部員である篠山瑞生の冒認に関連して、亜季が北脇に「…あの発明を取り戻せるかもしれません」というセリフが出てきます。最初「…あの特許を取り戻せるかもしれません」となっていたのです。

普通に聞いていたら何の疑問もなく「ああそう」という感じなのですがよく考えると、冒認特許を取り戻すためには月夜野ドリンク自体が出願している必要があると考えられます（異なる説もあるようですが）。ですがこの発明はノウハウとして出願はしていなかったため、特許法74条の適用がなく単に特許無効の効果が生じることになるだけだと、私は思いました。

そこで、この部分でもドラマの制作者とああだ、こうだ、と話し合い、これを曖昧にするために、よく考えてみるとよくわからない「発明を取り戻す」という表現に落ち着いたのです。

のちに、侵害訴訟で「無効との判断」が出る前に、和解で、無償で特許権を返してもらおうということも頭にあったので「取り戻す」というセリフを選択してもらいました。

法廷のシーンは2回あり、撮影にはまる1日を要したのですが映像で流れたのは前にも書いたように、合計5分54秒ほどでした。まあこんなものなのですね。結構朝早く出て、遠くまでロケに行っていたのに、とちょっと物足りない気がしました。しかし画面で見ると、過不足なく周到に用意されたなかなか優れたシーンだと感心しました。

更に、冒認の事実を認めざるを得なくなったハッピースマイルの知的財産部長の田所は、月夜野ドリンクから特許権の無償譲渡を要求されたことに対し、最初は「承知しました」と答える予定だったのです。しかし、知的財産部長が簡単に承知しました、と言えるような軽い問題ではないので「…の方向で検討します」にしてもらいました。別に、ハッピースマイルの社内で予め無償譲渡の合意がなされていたことを前提として、田所はその伝達のために月夜野ドリンクを訪問し「承知しました」ということにしてもよかったのですが、結局こうなりました。

最後に、私は、亜季が弁理士を目指すことを決意するシーンが見たかったのですが、残念ながら採用されませんでした。

感想

一番辛かったことは、この監修は私が一人で全責任を負ってやらねばならないこと。基本的な間違いが万が一にもあったらどうしよう、ということでした。過去のドラマでそのようなことがあったようなので。しかし、今はそのようなことはなかったと思っていますが。

全般を通して結構大変な仕事でしたが、弁理士や、弁理士の仕事を少しでも多くの人に知ってもらいたい、という一念で頑張れました。また私個人としても滅多に体験できない仕事をさせてもらい、いい経験になりました。まあこの経験を今後どこに生かすの？と言われてもちょっと困りますが。

ただ、今はちょっと燃え尽き症候群になったのかな、という感じもしています。

最後に、台本だけでは想像がつかない人間の機微や生き様を、俳優さんたちがもの見事に描いていて、「ドラマっていいな！」って思いました。

おしまい

読者の皆様の声をお待ちしています

パテント誌における情報、言論の流れはとかく一方通行に終わりがちであり、編集に携わる会誌編集部としては本誌が読者の皆様にいかに読まれているかちょっと気になります。

そこで、パテント誌では「読者の声」の欄を設けています。

「読者の声」欄に、参考になったこと、論考に対するご意見、編集者への注文などをEメールにてお寄せください。

「読者の声」のご投稿は・・・
日本弁理士会 広報室「読者の声」係
patent-bosyuu@jpa.or.jp



※ 500字程度で、氏名、年齢、職業、連絡先をご明記の上、ご投稿ください。

※ ご投稿頂いた「読者の声」は、パテント誌に掲載させて頂く場合があります。掲載させて頂く際は、事前にご連絡いたします。その際、一部を手直して頂く場合もございますので、ご協力をお願いします。